記　録　広島大学文書館企画展「名方義純収集短冊『昭和のかお里』優品展」の記録

石田雅春

はじめに

広島大学文書館では、ホームカミングデーおよび大学祭にあわせて平成二五年一一月一～二日の二日間、中央図書館ロビーにて企画展「名方義純収集短冊『昭和のかお里』優品展」を開催した。本稿では、この概要について報告する。

1. 名方義純収集短冊「昭和のかお里」収蔵の経緯

名方義純（なかたよしずみ）（本名は名方守夫）は、広島県師範学校（現広島大学大学院教育学研究科）の卒業生である。明治三二（一八九九）年に広島県芦田郡広谷村（現府中市）の中戸家に生まれた名方義純は、大正八年に広島県師範学校を卒業した。卒業にあたり名方義純は、成績優秀であったため広島県より銀時計を授与された。

その後、生家に近い古府尋常高等小学校で教鞭を取っていたが、母方の実家である名方家へ養子に行くこととなり、大正一〇年四月に名方家が経営する株式会社寿商店（神戸市）に入社した。寿商店は、コーヒー豆の輸入とレストラン経営を行う会社で、カフェ「ブラジル」の店名で神戸市の他に岡山・呉・広島などに喫茶店を開業していた。

こうした寿商店の仕事のかたわら、名方義純は、各界の著名人に対して短冊への揮毫を依頼して墨跡を収集することを始めた。こうして昭和五四年三月に七九歳で死去するまでの間に、名方義純は昭和時代の著名人約二、二〇〇人分の短冊および色紙を集め、「昭和のかお里」と名付けたのであった。

昭和時代の著名人の墨跡について、これほど網羅的に収集したコレクションは類例が無く、「昭和のかお里」は美術的・学術的に高い価値を有している。

さて名方義純の死後、「昭和のかお里」は、ご子息の名方幸介・平八郎の両氏によって大切に保管されてきた。こうしたなか昨年、長男の名方幸介氏より亡父の母校である広島大学で保存・活用して欲しいという申し出があり、文書館が受贈したのであった。

2. コレクションの成り立ち

企画展の展示にあたっては、名方義純の経歴とともにコレクションの成り立ちについても紹介した。短冊の収集方法は、名方義純が揮毫を依頼する手紙を送り、著名人からの返事を待つという単純なものである。

ただ残されている依頼状（写真1）をみると、和紙の巻紙に墨書で、しかも上手な草書で文面がしたためられていることが分かる。（なお依頼状には、揮毫のための短冊二枚と返信用の切手が同封された。）

こうした丁寧な依頼状を繰り返し出し続けることで、多くの著名人から返信という形で短冊が送られてきたのであった。ただ返事のあり方は、人によって異なり、①名方氏が同封した短冊に揮毫するもの、②自分が愛用する短冊に揮毫して返信するもの、③色紙や扇面に揮毫するもの、など千差万別である。

また返事をしない著名人も多かったと思われるが、なかには丁重に揮毫辞退を返信する著名人もあった。ところが、こうした返事までも名方氏は大切なコレクションとして収集している。コレクションの成り立ちを考える上で興味深いため、こうした辞退の返事の例として、清水崑（写真2）、平賀譲、松本幸四郎、柳田国男のものを展示した。

こうして集められた短冊や色紙は、名方氏自身の手によって装丁が施された。その上で自作の短冊帳に収納して大切に保管されてきたのであった。

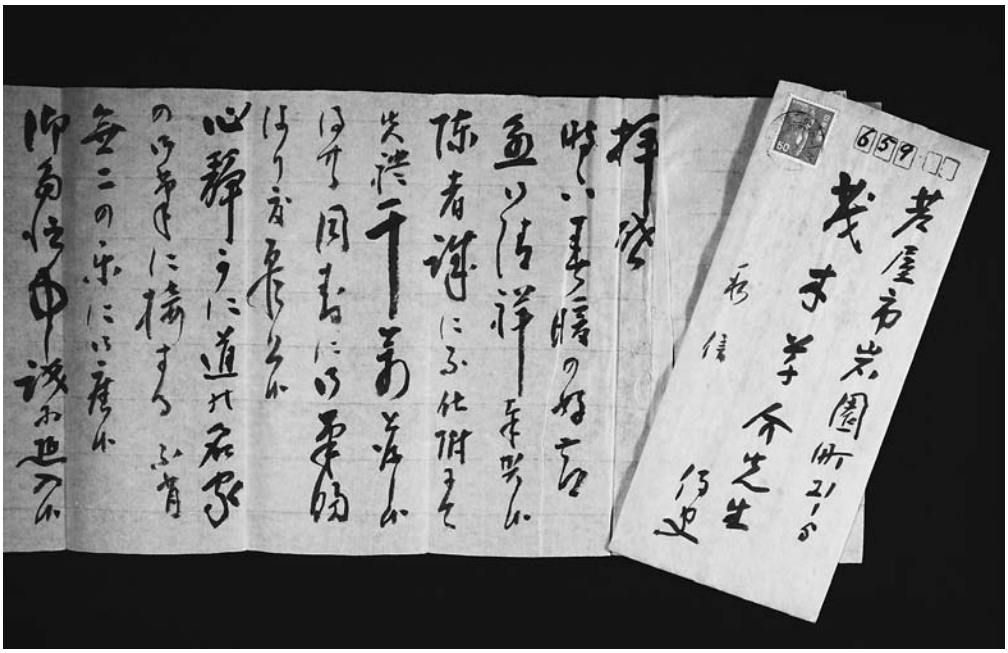


写真1

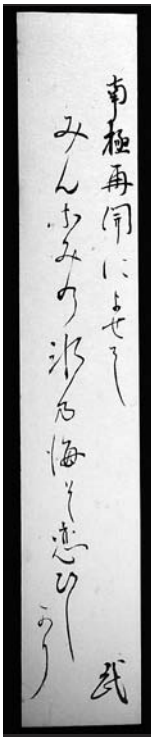
写真2

3．展示品の紹介

今回の企画展では、数あるコレクションのうち、文化の日（一一月三日）にちなんで学術・芸術・芸能に関係ある人物の短冊を選んで展示した（後掲表参照）。紙幅に限りがあるため、本稿では以下三点を紹介する。

地球物理学者の永田武（一九一三～一九九一）は、昭和三一年の第一次南極観測隊隊長、南極地域観測特別委員会委員長などを歴任し、日本の極地研究に貢献した人物である。展示品（写真3）は、昭和四〇年六月に送られてきたもので、同年に派遣が再開された南極観測隊への所感が記してある。

写真3



洋画家の小磯良平（一九〇三～一九八八）は、陸軍省派遣画家として戦争画を描いたことが、戦後の彼の評価に大きな影響を与えたことが知られている。展示品（写真4）は昭和一七年一二月に送られてきたもので、「ジャワバリ島ニテ」という題辞からも明らかなように、小磯が従軍画家として活動していた時の作品である。

写真4

俳優の森繁久彌（一九一三～二〇〇九）の短冊（写真5）は、ウナギを短冊の中央に描き、その上に「つかみどころのない奴だが　腹を割りて焼いて見りや　ちつたあ味のある男」と気の利いた文を記している。芸能人の短冊は芸名の「サイン」だけのものが多い中で、とりわけ異彩を放っている。

写真5

「昭和のかお里」に集められた著名人の揮毫は、バラエティーに富んでいる。本稿ではごく一部を紹介したが、送られた短冊にあわせて短歌や狂歌を書くもの、座右の銘を書くもの、自分の名前をサインするもの、あるいは絵を描くものなど、十人十色である。それぞれの著名人の人柄がうかがえるとともに、その人の人生の一場面を象徴するような内容が記されている場合も少なくないのである。

おわりに

今回の企画展示では、コレクションのごく一部を紹介したにすぎない。今後は文書館において目録を公開し、広く利用に供する予定である。また、美術品としての魅力を多くの方々に知ってもらうために、文書館では「筆の里工房」（熊野町）と提携して定期的に展示する機会を設ける予定である。そしてこうした取り組みを通じて、「昭和のかお里」を永く後世に伝えるとともに、寄贈の趣旨に応えるように努めたいと思う。

（**いしだ　まさはる**・広島大学文書館）

表 「昭和のかお里」優品展　展示短冊一覧

展示品名
清水崑短冊「ごかんべんください」
平賀譲短冊「例の通りニて乍折角御断候」
８世松本幸四郎短冊（1）「私は筆の字はなれて居りませんのでサインだけでお許し下さい」
８世松本幸四郎短冊（2）サイン：松本幸四郎
柳田国男色紙（揮毫辞退の書翰）
森戸辰男短冊（1）「和而不同」
森戸辰男短冊（2）「学不厭教不倦」
亀山直人短冊「研究はいとも興味深くあれどもその会長や議長は難苦の役かな」
永田武短冊「南極再開によせて　みんなみの氷の海ぞ恋ひしかり」
湯川秀樹短冊「われは物の数にもあらず深山木の道ふみわけし人志偲ばゆ」
牧野富太郎短冊（1）「富士之山遠く望めば姿かな近寄り見れバ太き土塊」
牧野富太郎短冊（2）「朝夕に草木を吾れの友とせば、こゝろ淋しき折ふしもなし」
本多光太郎短冊（1）「 職業報国」
本多光太郎短冊（2）「智能は徳器の基」
小磯良平短冊（画：ジャワ美人）
藤田嗣治短冊（1）画：エビ
藤田嗣治短冊（2）画：蚊
鹿子木孟郎短冊（1）「御来旨ニ対し鐵棒一本差上申候」
鹿子木孟郎短冊（2）画：鐵棒
横山大観短冊（画：富士山）
６代目清水六兵衛短冊「花開けば自ずと来る」
円鍔勝三短冊（1）画：老梅
円鍔勝三短冊（2）「芸於遊」
六角紫水短冊（1）画：梅花
六角紫水短冊（2）画：老木
６世中村歌右衛門短冊（1）「雛飾るわづかの塵もいとひけり」
６世中村歌右衛門短冊（2）画：梅花
６世尾上菊五郎短冊（1）画：菊花
６世尾上菊五郎短冊（2）画：菊花
５代目三遊亭円楽短冊（1）「里仁為美」
５代目三遊亭円楽短冊（2）「恭而安」
立川談志短冊（1）「笑うこと笑わせること共に素晴らしい」
立川談志短冊（2）「喋る楽しさむつかしさ」
川端康成短冊「生涯一片心水」
井伏鱒二短冊（1）「霧島は雲にとられて池ひとり」
井伏鱒二短冊（2）「ひとり居て風なき夜の置炬燵」
山田耕筰短冊（1）明治頌歌楽譜
山田耕筰短冊（2）「音楽は言葉なき祈り」
服部良一短冊（1）「鳥恋花人恋歌」
服部良一短冊（2）「生涯只有詩酒歌肴」
三浦環短冊（1）「声」
三浦環短冊（2）「お蝶夫人」
淡谷のり子短冊（1）「枕辺のりんどうに秋ふかまりぬ」
淡谷のり子短冊（2）「りんどうは山の心を秘めてゐて」
藤岡琢也短冊（1）「人生に執着はないあるのは芸への執念だ」
藤岡琢也短冊（2）「浜町に春よぶ風の花のれん」
緒形拳短冊「秀吉の言へる人みなわれをふくめてふびんなり」
森繁久弥短冊「つかみどころのない奴だが腹を割りて焼いて見りやちつたあ味のある男」
二葉あきこ短冊「二葉はうたの影法師うたも私の影法師」